

造形の記紀神話

埼玉古墳群を世界遺産に

柳沢賢次

まつやま書房

判型 A5: 148*210

本扉

はじめに

はじめに

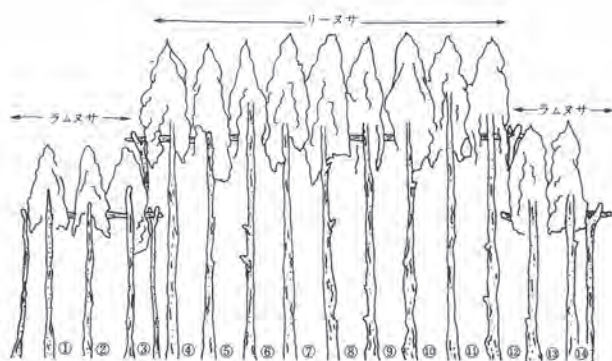
『古事記』『日本書紀』の神話は、記紀神話と呼ばれている。記紀神話は長い間にわたり伝承され続けた時があった。

なぜ、そんなことがわかるのか。それはその代表的なものが埼玉古墳群として残っているからである。

埼玉古墳群はもともと、何を言っているのか解読できるものであった。ところが、その解読方法が途切れて、解読できる人がいなくなってしまった。

記紀神話は伝承されたものであるということは、例えばが悪いのだが地震に例えられる。地震は震源地がある。いつどこで起こり、どこまで波及していったのかの問題が生じる。

このいつどこまでもを論じることは、恐らく一回限りのことも考えられるので容易ではない。記紀神話が伝承によるものである



- | | |
|-----------------------------------|-----------------------------------|
| ①ヌサコルカムイ (幣場の神) | ⑧エサヌプリサントツカシシトシビカムイ (恵山岬を見守る神) |
| ②シリコルカムイ (太地の神) | ⑨ルベシベサントツカシアノランケカムイ (ルベシベ地方を見守る神) |
| ③キナツカムイ (長ものの神) | ⑩カイベリルカエブキネカムイ (くだけ波の上を見守る神) |
| ④ピンネアイハシナウコルオイナマツ (太陽の神) | ⑪シアシベタンネカムイエカシ (葛野家の祖先を見守る神) |
| ⑤サマツキヌプリサントツカシアノランケカムイ (三峰山に住まう神) | ⑫シトウンビカムイ (狐の神) |
| ⑥ベケツウノイエカムイエカシ (静内川の川殿を見守る神) | ⑬バセオンカミ (先祖の重要神) |
| ⑦ノヤストツカムイチカッポ (農屋地方を見守る神) | ⑭ワッカウシカムイ (水神) |

図0の1 木幣群図

梅原猛・藤村久和ほか『アイヌ学の夜明け』(小学館 1990)より引用転載



図0の2 イザイホー主祭場・久高殿
比嘉康雄『日本人の魂の原郷 沖縄久高島』（集英社 2000）より引用転載

るとの要件をしつかり定義することも必要
になってくる。

どこまで波及したのかも容易ではない。
震源地と考えるところを、極めて大雑把に
決めて、その一番外れと考える地をあげて
みる。

北は、アイヌの幣場^{めさば}に表現されている。
北海道日高郡新ひだか町^{しずないどうべつ}静内東別の葛野家
の幣場である。幣場は三区分されており、
向かって左はヘビ神（長ものの神）、中は上
から見守る神、右は先祖の重要神になる。

南は、沖縄県南城市の久高島である。
十二年ごとの午年に行われるイザイホー（神
女就任式）の主会場になる。向かって左は海
蛇イラブーの燐製所、中央奥に木の繁るイ
ザイ山、右は先祖の重要神を祀る白樽宮^{しらたる}に
なっている。

記紀神話では、左は出雲の八岐大蛇^{やまたのおろち}、

中は近江の天上に想定されている高天原のタカミムスヒ、右は伊勢神宮のアマテラスになる。

イザイホーの歴史は五百年ほど前に、「ノロ制度」が施行された時に、神職者組織を編成するために行われるようになったと考えられている。

首里王府は琉球弧の間切（町村の古名）と島々に、ノロと称する土地を給する宮人として女性神職者を任命した。

イザイホーの歴史がそれほどのものならば、記紀神話伝承が八世紀初めに編纂されてから、その後もながながと伝承され続けていたことになる。その正確さに感心する。

このように記紀神話は伝承されてきたものであり、伝承のされ方は埼玉古墳群でもよく物語っている。伝承された内容が、埼玉古墳群の伝承は必ずしも記紀神話として記述されていないこともある。例えば、埼玉古墳群の伝承では、天神と地祇の地上での激突が表現されている。高天原に相当する稲荷山古墳から地上に降臨したホノニギに相当する奥の山古墳が、地祇の鉄砲山古墳に体当たりしている。そのため、奥の山古墳は大きく歪んでいる。

他にも高天原からホノニギに随伴した天神の戸場口山古墳は、中の山古墳に食い込んでいる。さらに地祇の援軍として浅間塚古墳は駆けつけている。

埼玉古墳群は、後に述べる左上位のI型配置になっている。そのため、地上が平穏になっていないので、高天原の統治者が女神、つまり稲荷山の中心樞の被葬者は女性という決まりになっている。

そもそも、埼玉古墳群のような配置は、他にも存在している。基本型は仰向けになった人の形をしており、稲荷山古墳は顔、將軍山古墳は左腕になる。右腕は折り曲げた状態で丸墓山古墳、愛宕山古墳、

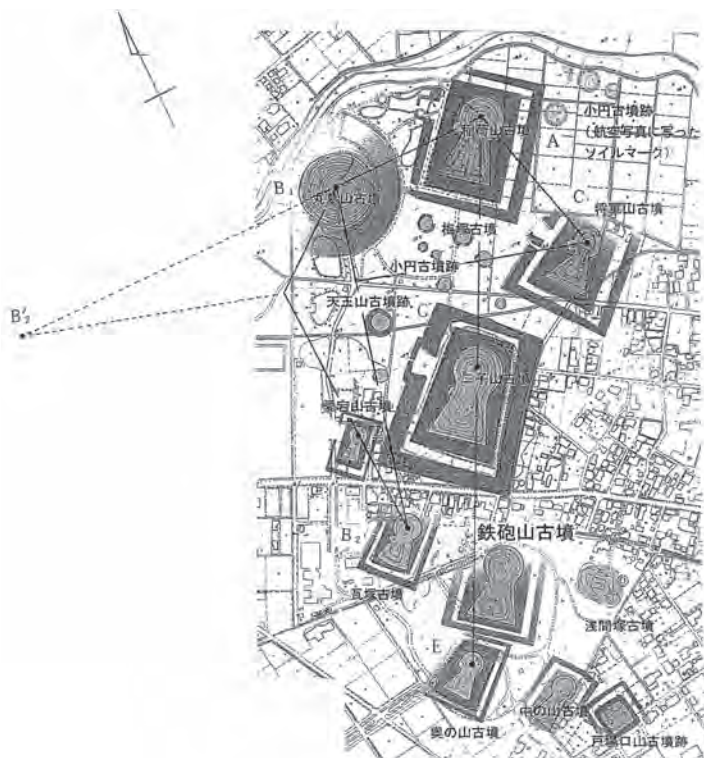


図0の3 埼玉古墳群
埼玉県立さきたま史跡の博物館「鉄砲山古墳発掘2010.9.25現地説明会資料」
に引用加筆

瓦塚古墳になる。二子山古墳は胴体、鉄砲山古墳は腹部というわけである。さらに、そろえて真っ直ぐ伸ばした両足のかかとの部分は奥の山古墳になる。

ここからわかることは、遠い先祖は子孫が確実に神話を理解するように、伝えようとしていたことである。ちゃんと残る物で作り上げている。

記紀神話は、その人の形をした基本型を、日本列島に最大限に拡大しているのである。ホノニギは日向の高千穂に^{あまくだ}天降った後、笠沙の岬に到達している。笠沙の岬は薩摩半島西南端、南さつま市笠沙の野間岬に比定されている。

埼玉古墳群は埼玉県行田市に存在するが、はるかに遠い笠沙の岬とかかわりがあるこ

はじめに

歴史学者は、文字を通じて歴史を構成しているが、実に文字とは不便で不正確なものではないか。その不便さが良くわかるのは、記紀神話伝承の一過程を背負っている埼玉古墳群である。埼玉古墳群は、古墳という造形物による表現手段を選択している。記紀神話は後発的に文字によって、その一部分が表現されているにすぎない。本当はいちいちその選択理由は何なのか、吟味する必要がある。

埼玉古墳群の神話伝承は、歴史を理解するために、文字の位置づけを具体的に教えてくれるまたと

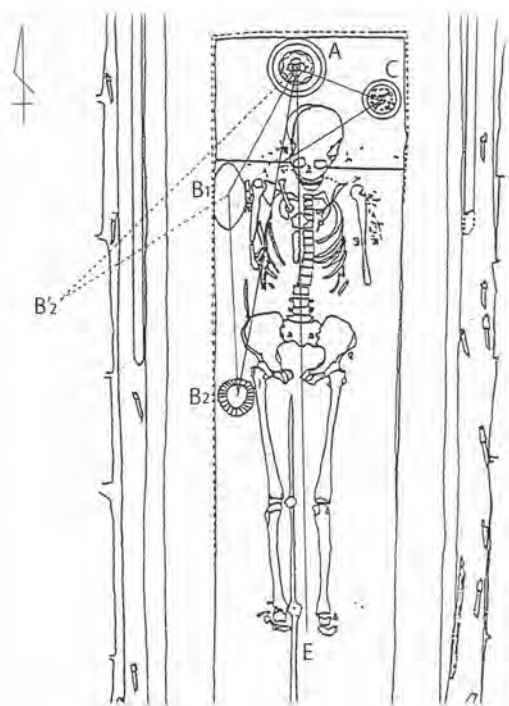


図0の4 向野田古墳の天孫降臨
富樫卯三郎『向野田古墳 宇土市埋蔵文化財調査報告書
第2集』(熊本県宇土市教育委員会 1978)第13図(上段)
棺内・棺外遺物配置状態に引用加筆

とになる。埼玉古墳群は驚くほど多方面のことや、ものと関係に及んでいる。この度、その多方面がわかるように、一冊の本にしたいと考えた。

埼玉古墳群を知ること、古代日本を理解するのに実に便利だ。埼玉古墳群を分析することは、古代日本を理解することでもある。埼玉古墳群の分析をしなければ、古代日本は的外れになる可能性がある。



埼玉古墳群
埼玉県立さきたま史跡の博物館提供

ない好例となっている。そうは言っても、私の手法は、現在の学問研究の位置づけとして、肯定的に確かなものとして扱われているわけではない。

三十代半ばが過ぎた時、私は東京大学に事務員として勤務していた。私なりに気づいたことを雑誌に投稿した。その方面の研究に大学では何人かが携わっていた。

私の発表に対して、「研究とは既存の論文に対して、付け加えることだ。まったく前例のない考えでは、評価の仕様がなない」

と言われる始末であった。

私は、そのように付け加えることよりも、その対象は正しいことが証明されているのか、疑問になる。例えば、記紀神話は造作されたことを前提として、その造作された時期が論争されたことさえある。

また、他でも述べているが、「記紀神話は人の形をしている」とする考えは、文化人類学の大林太良ゼミの院生による、帰りの京王井の頭線の電車内での会話である。大林氏のその発表を待っていたのだが、他界されてしまった。

私としては、そのまま放っておくわけにはいかない。というのも、私がこれから述べようとする記紀神話の基本型と大きく関わってくるからである。

その基本型に関して、人を介して「今は別の研究すべきことがあり、研究すべきものではない。二〇〇年後にすべきことだ」と伝えてきたことがある。

研究とは、職業としての研究者の得手勝手なものだろうか。研究を私物化して、権利ばかりで義務は生じないとは思わない。私のような者でも発表の義務があると考えたい。

私は、大勢の人が埼玉古墳群を見学に来ることを望み、古代からの神話伝承が解読されることを望む。遠い祖先が埼玉古墳群のように有形物として神話を残したことを誇りに思いたい。人類史を豊かにするものとして、世界遺産に登録されることを切に願う。

〈目次〉

はじめに 1

一章 『記紀』と無文字時代の伝達方法——記紀神話は自らの出自を語る——

一 『記紀』研究は無理なのか 12

二 偶然の分類 17

三 造形の伝達方法 21

四 記紀神話は自らを語る 27

五 『記紀』の外部的資料 32

六 測量技術と記紀神話 41

二章 造形の記紀神話——高天原と宮都配置について——

一 造形と文字の神話 48

二 たった四点の神話 52

三 扁平三角形と一直線の神話 56

四 造形の神話 64

五 文字の神話 68

- 六 文字神話はI型 71
- 七 評価されるアマテラス 77

三章 計画された埼玉古墳群——幾何学的配置関係の拘束性——

- 一 埼玉古墳群の築造集団 90
- 二 埼玉古墳群と設計図 94
- 三 埼玉古墳群の特徴 98
- 四 何のための西側重視か 104
- 五 大きいことは 107
- 六 屈曲は歪みの範囲か 111
- 七 徹底した計画 117

四章 天孫降臨後の直線七〇〇キロ——『記紀』の役割分担について——

- 一 測量技術と古代日本 122
- 二 宮都配置の決まり 127
- 三 高天原の代表点 133
- 四 『記紀』の分担 136
- 五 向野田古墳の天孫降臨図 143

六 笠沙岬から天の磐座へ 149

七 測量技術と記紀神話 152

五章 浅間山とアマテラス——真楽寺の創建理由について——

一 真楽寺の伝承 158

二 浅間山 163

三 三重県の特徴 170

四 三重県と浅間山南麓 174

五 浅間山より西 178

六 真楽寺とアマテラス 183

あとがき 188

一章

『記紀』

と無文字時代の伝達方法

— 記紀神話は自らの出自を語る —

一 『記紀』研究は無理なのか

現代人の『記紀』研究は、的外れになっていると思うことがある。ところが現代人でさえ、無意識的に記紀神話伝承の基本型に従った分類にしてしまうことがある。その基本型は主に造形物の配置によって表現される。

記紀神話の伝承過程における、伝承物が今も残されている。その資料の存在は、ないとされている『記紀』の外部資料が存在していることを物語っている。一組の外部資料は測量技術の進歩とともに拡大してきた。

かねがね、私は、現在の学者や研究者が『古事記』と『日本書記』（以降、『記紀』と表記する）の研究をするのは難しすぎる、というより無理だと考えてきた。どうやら、私はその理由を多少とも説明できるようになった。一刻も早く説明しなければならぬ。

『記紀』は無文字時代の独特な一定の伝達方法を基準に、その説明もなしに述べられている。『記紀』の読者は、その伝達方法を理解していることを前提としているのである。

このことは『記紀』の編纂当時、その伝達方法を理解していることは、編纂者の必須条件であったことはいまでもない。そのため、その後の研究者は伝達方法を知らないのでは話にもならない。伝達方法は現在に伝えられてはこなかったもので、いつの頃から途切れてしまっている。

現在、『記紀』研究の研究者では、最もこだわりのなっているのは津田左右吉の考えではないだろうか。その考えに賛成にせよ、反対にせよ、そうであろう。

ただ賛成者と反対者に共通していることは、どちらも確かな証拠を掲げられないことである。古い昔のことなので確かな証拠など示せるはずがないと、論争をしたところで、自分も相手も安易に思っているため、決着はつかないと安心しきっているのではなからうか。そのため言いたい放題になりやすく、はなはだ研究に相応しくない様相を呈しているように思う。

その点、私のこれから提示しようとしている証拠は、単なる思う、考えられるにとどまらず、具体的な物を提示したい。まず、これまでの学説をどうとらえるのか、具体例で考えてみよう。

じつに多くの研究者を納得させている津田の考えをみてみよう。記紀神話は六世紀の前半の継体―欽明朝のころ、宮廷が、天皇は悠久の昔からこの国土をおさめていたことを説くために述作（ファブリケート fabricate）したものであつて民族とともに伝わってきた歴史の伝承ではない¹としている。

津田は記紀神話はでっち上げたものだというが、じつは記紀神話では自ら一定の伝達方法により伝えられてきたものと述べている。津田はそのことに対して断るべきだったのである。

断ったうえで津田は述作だと言い張る確かな証拠を提出すべきだったのである。もつとも伝達されてきたと解説できれば、他の関連事項もわかり、言い張るはずもなくなる。

津田はこれに限らず、これと同様の態度を繰り返している。なにも『記紀』編纂時にはそっくり文字の無かった時代の考えが不確かになってしまったわけではないのである。

記紀神話は民族とともに伝わってきた歴史の伝承ではないと、否定的に述べている。歴史の伝承ではないといえるかもしれないが、どうやら記紀神話は民族とともに伝わってきたといえそうなのである。現在、方々^{ほうぼう}にその証拠が残っている。

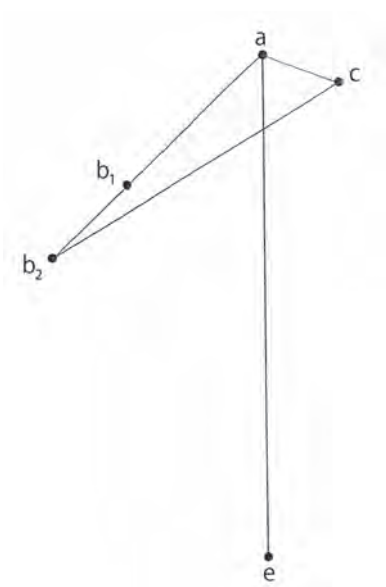


図1の1 伝達方法の基本型

それと記紀神話の最初の記述は六世紀の前半の継体―欽明朝のころとしたために、宮廷が述作したとなるのだが全くの誤りである。実際に記紀神話を伝える伝達方法は、現在において朝廷の存在が認められていない時代まで遡ってしまう。
それは紀元前三五〇年頃の福岡県西区吉武字高木の吉武高木遺跡の墳丘墓まで遡ることが可能なのである。^②すでに後々の高天原・出雲・伊勢などを表現していると思える墳丘墓が存在している。当然のことながら今後は吉武高木遺跡よりも前にその伝達方法は存在していたのかを確かめなければならぬ。吉武高木遺跡の後、図1の1のように伝達方法は一定の配置により相似形の幾何学的配置を維持するようになる。

図1の2のように、やがてその相似形の配置は、列島上に最大限まで拡大される。それは記紀神話の基本型といえる。

これから私の説明に用いるのは、列島の文字のなかった時代に存在した独特な一つの伝達方法である。その伝達方法の適用範囲内に記紀神話は入ってしまうことになる。

記紀神話は津田のいうのとは異なって、古くからの伝統がある。最近津田に満足せず、八世紀前後の藤原不比等だという研究者もいる^③始末である。

一章 『記紀』と無文字時代の伝達方法
 —記紀神話は自らの出自を語る—



図1の2 記紀神話の基本型

その伝達方法は適用範囲が広く、とりわけ『記紀』研究においては重要である。『記紀』を理解するには、『記紀』の全面的に、伝達方法が重複して使用されていることに心得るべきなのである。

津田は『古事記』のできあがったあと、わずか二年で、しかも同じ元明天皇の和同七年(七二四)に、新たに国史撰集の事業が企てられたのは何故であるのか、まったく了解ができない⁽⁴⁾”と述べている。

しかしながら、これから説明しようと考えている伝達方法は、『記紀』は初めから同時に存在することを計画されたものであることがわかる。同時に存在することによって、『記紀』の理解がしやすく、むしろ理解は可能となっている。『記紀』は別個扱いされることのない、対の関係になっているのである。

津田は、「神代紀の注の多くの「一書」の中には、ほぼ『古事記』と同じものがあるので、それと『古事記』との関係が問題になる。この二つはよく似

ているが、どの場合でもそれにいくらかずつの差異はあって、まったく同じではない^⑤」といい、それはなぜかと問うている。

これは私が説明しようとする伝達方法が、記紀神話の編纂の基本になっていることを、よく物語っている。「よく似ているが、差異があつて」とは、神話が歴史の変遷をもつて伝えられたとまで考えられるのかの問題にもなってくる。

はつきりいえることは『日本書記』神話の本文・一書、『古事記』神話の相互の位づけの問題にかかわってくる。これらは伝達方法でははつきり位づけがされている。

さらに津田は、「文字のなかった時代の歴史的事実のいくらかの言い伝えが文字の用いられるようになった時代に存在していたかどうか、――『記紀』にそういう言い伝えが含まれているかどうかは、二書の記載そのものの研究によつて判断するほかはない^⑥」といっている。

津田の頭の中には、無文字時代には、前言往行ぐらいしか考えられないのか。しかも『記紀』の物語にあらわれていないゆえに、はじめからなかったものとしてしまう^⑦。『記紀』は無文字時代の伝達方法を中心にすえて展開しているため、現在の研究では頓珍漢の疑問もはなはだしいことになつてしまう。

津田は、文字のないような「幼稚な社会では、過去の事実を事実としてのちに伝えようといううな意図があるらしくはない^⑧」という。これから述べようとする伝達方法は明らかに後世に伝えようとした一大事業であつた。津田の考えは伝承されていた当時からみれば現代には肯定されても、あまりにも外的外れな一人よがりの考えなのである。

二 偶然の分類

時々私は、無文字時代の伝達方法をまったく知らなかったために、かえって説得力のある、その伝達方法のすぐれた研究者を見つけることがある。偶然に優るものはない。

その具体例を森博達氏ひろみちの『日本書記の謎を解く』(一九九九・中公新書)よりみてみよう。まず、次の記述に注目しなければならない。

森氏は、「宣長も指摘しているが、『古事記』や『万葉集』などは呉音系で、『日本書記』だけは漢音系である^⑨」と述べている。

伝達方法を考えるうえで、どれが、基準になっているのか、どれが多数なのか、あるいはどれが早く存在しているのかは重要なのである。『古事記』は呉音系で、『日本書記』は漢音系であることは特に重要なのである。呉音系と漢音系はどのような特色があるのだろうか。

森氏は、「呉音は四〜六世紀頃の南朝音を母胎とし、漢音は七〜九世紀頃の首都、長安を中心とする唐代北方音を母胎としている^⑩」と述べている。

さて、森氏は、「七二〇年に完成した『日本書紀』全三十巻は、わが国最初の正史である。その記述に用いられた漢字の音韻や語法を分析した結果、渡来中国人が著わした α 群と日本人が書き継いだ β 群の混在が浮き彫りになり、各巻の性格や成立順序が明らかとなってきた^⑪」という。

はたして、それはどのような意味があり、わざわざ二分類にしているわけは何であろうか。それには森氏は答えていない。

そのうちの α 群とは何かということになる。森氏は、「 α 群では、単一の字音体系に基づいて仮名が表記されている。しかもそれは当時の北方音であり、中国音そのものである。要するに α 群は、七世紀後半から八世紀初頭の唐代北方音に全面的に基づき、原音によって表記されている⁽¹²⁾」という。同様に、 β 群とは何かということになる。森氏は、「 β 群では倭音に基づく仮名が数多く用いられている。また、漢音系のみならず呉音系の仮名も用いられている。複数の字音体系に基づく仮名が混在している。 β 群では既成の仮名が少なからず利用され、漢字の原音（中国音）や単一の字音体系による吟味が行われなかったのである⁽¹³⁾」といっている。

ここまでくると森氏のいっていることは、それ自体は表のように当てはまることから、正しいことがわかる。

ここで『日本書記』の漢字表現がそれほど自在にわかるのかと、私は問われるかもしれない。森氏は無文字時代の伝達方法の特徴と同じ説明をしているので、実際に正しいことが私にとってはよくわかるのである。

しかも、森氏は β 群に対して、「複数の字音体系に基づく仮名が混在している」とか、「既成の仮名が少なからず利用され、漢字の原音（中国音）や単一の字音体系による吟味が行われなかった」ということは、それらに対する不満を感じているようである。だが、そのことが的確に、伝達

型		代表点	記紀神話	字音体系 巻別分類	神名	埼玉古墳群
高天原	A	a	-	-	タカミムスヒ	稲荷山古墳
出雲	B ₁	b ₁	『紀』神話の本文	α 群	スサノヲ	丸墓山古墳
	B ₂	b ₂	『紀』神話の一書	β 群	オホクニヌシ	愛宕山古墳 瓦塚古墳
伊勢	C	c	『記』神話	漢化和文	アマテラス	將軍山古墳
宮都	D	d			(神武天皇)	
日向	E	e			ホノニニギ	奥の山古墳

表 1 日本書紀巻別字音体系と相互関連の特徴

方法の一部分であることを物語っている。

これは『日本書紀』の意図的・計画的なことに基づくものであって、 α 群と β 群は伝達方法によって何にあたるのか、即答できることになる。適切な言葉ではないが、森氏の無文字時代の伝達方法の研究は結果的にはすばらしいことがよくわかる。

さらには α 群は単一の字音体系、 β 群は複数の字音体系としているのも、伝達方法の基本である。一対複数の関係、それで『日本書紀』が一つにまとめられている。これって伝達方法の何なのかということになる。

ところが、当然のことながら、森氏にとっては『日本書紀』の編修についての疑問となってしまう。 α 群の巻一四の雄略即位前紀に『妻を称いひて妹とする』とみえる。「日本人にとっては自明のことであつた。それゆえ β 群では「妹」字が妻の意味で用いられている場合でも注釈は加えられていない。ところが、 α 群の冒頭では、「蓋し古の俗か」と奇異な疑問を抱いているのである。日本語に精通していない者の懷疑である。中国人による原注であろう¹⁴と述べ、「漢語、漢文の誤用は β 群に偏在し、 α 群は基本的に正格の漢文によって綴られていることが明らかになった。要するに、述作の姿勢や発想が根本的に相違するのだ。 β 群は日本語的発想によって書かれ、 α 群は中国語で書かれたのであるとする¹⁵」。

「 α 群中国人述作説」の節の終わりに、森氏は、「 β 群の編修にはなぜ中国人が参画しなかったのか¹⁶」と疑問を提示する。それは α 群はなぜ中国人の「蓋し古の俗か」と奇異な疑問のままにしておくのとどのような関係になるのだろうか。

α 群には中国式に間違ふことが必要だったからである。 β 群に「漢語・漢文の誤用」が偏在しているのとは、意味合いが異なる。 β 群の誤用は誤用というより当時の日本式に近くなることが必要だったのである。

「 β 群の選述者は、中国原音としての正音（唐代北方音）に暗かった。また潤色、加筆者は正格漢文に通熟していなかった。人材が不足していたのだ⁽¹⁷⁾」と森氏は考えるが、かならずしもそうとはいえない。

伝達方法にとつては、 α 群・ β 群のその特徴は、まさにそれ自身は正しいのである。そして α 群・ β 群のほかにそれに対応するに相応しいものの存在に考えが及ぶことになる。この伝達方法には α 群・ β 群にさらに添えて図1の1の扁平三角形になる一式の完成が必要なのである。

これまでみてくれば、多くの予測が伝達方法の決まりにより可能である。森氏は多くの具体例から『日本書紀』の述作は α 群が β 群に先行した。 α 群は主に持統朝に述作され、 β 群は主に文武朝に述作された⁽¹⁸⁾と結論づける。

だが、その理由はもちろん、 α 群と β 群の存在理由がまったくわかっていないようである。ここは『日本書紀』の編纂者に不信を募らせる場合ではないことを理解いただきたい。

三 造形の伝達方法

日本の無文字時代には、私がこれから述べようとしている伝達方法が一つだけではなかった。ここにも井上光貞氏のいうように、日本の歴史の歩みをたどるには、『記紀』の神話・伝承などにわずらわせないで、たしかな記録と考古学の成果をもちいて、歴史の歩みと、そのときどきの人びとの生活をできるだけ再構成してみることである^⑭という場面にいくわすことになる。

この「『記紀』の神話・伝承などにわずらわせないで」とは、今もつてそうなのだが、『記紀』の神話・伝承は歴史的事実として扱うことができないという意味が含まれている。そして「たしかな記録」とは、『記紀』以外の日本の記録ではなく、外国が当時の日本のことを述べた記録なのである。また、井上氏は、『記紀』も歴史の所産だから——その素材のなかには、遺跡や遺物を研究する人類学や考古学ではとうていとらえることのできない、わたくしたちの祖先の思想や習慣が無尽蔵に編みこまれているということである^⑮——といている。私はこれは歴史学者の買いかぶりではないかと考えている。

「神話から歴史へ」でみるように考古学者と文化人類学者を参加させている井上氏ですら、歴史学者は考古学や文化人類学と距離をおこうとするのだが、私がこれから述べようとしている伝達方法は、『記紀』が文字で表現している。しかも文字より造形は表現が優っていて、わかりやすいことが多いようである。

そういうためには初めはおまえも、文字から造形を理解しようとしたのではないか、と反問され

るかもしれない。伝達方法とは、文字に限らず、どれも知っていることが前提なのである。造形の伝達方法も知っていたならば、本来は文字のなかった時代のものであるから、文字を頼るなど回りくどいことは、けしてしないはずである。

『隋書』倭国伝に「無文字唯刻木結繩」とみえる。「倭国」とは、倭国、日本の事である。日本は「文字がなく、文字の代わりに、ただ刻木・結繩のみで伝達している」といつている。

現在の日本の学者は「刻木」「結繩」が伝達方法の手段だという実感がない。そのため「木を刻み、繩を結ぶ⁽²⁾」と訳しているのをよくみかける。

これから述べる伝達方法は、その刻木でも結繩でもない。つまり、『隋書』はその伝達方法をもらしていることになる。

刻木とは木を刻み方により、結繩とは繩の結び方により、意思を伝える方法である。それ自体は日本独自のものではなく、中国大陸にも存在する。

刻木・結繩のうち、片方だけを用いる民族もあるが、両方を用いる民族は多く、それはチベット・ビルマ語族である。チベット・ビルマ語族は、日本民族成立の根幹にかかわっていると考えるべきであろう。

刻木・結繩に対し、『記紀』に多用されている伝達方法は、さしずめ「造形」とでもいうべきものである。次にそれに適している言葉は「配置」であろう。造形を置いて、相互の位置関係やその置く順序を全体として表現する。

無文字時代の伝達方法といってきたが、文字が存在するようになって、かならずしもそれまで

の表現がなくなるものではなかった。その状況を知ることによって、日本人の文字に対する態度がわかり、文書の理解に極めて有効なのである。

津田は「シナの典籍の光によって明けはじめたわれわれ民族の歴史のはじまりが、わが国の文献によって開かれるそれよりも遥かに古い」といい、『記紀』の転載の上代（古代のこと）の部分によってわれわれの民族の上代史はわからない²²」²³といきるけれども、はたしてそうとばかりいえるのであろうか。

刻木や結縄は、かならずしも紀元前のものは保存されているとは考えがたいが、造形は残っている。今回は紀元前にあたるものを主な例として使用はしないが、私の身近に存在する。具体的に多くのことを解明できるものを例にとりたい。

造形の伝達方法といっても、まったく同じ表現になっているのではない。それはそれぞれ同様の手段をとるが、伝える目的は多岐にわたっているからである。造形の伝達方法一セットにはそのための一定の共通した決まりがある。

それを客観的に表現できていなければならない。そして一定の共通した決まりの表現の一部をうまく気づけば、造形の伝達方法一セットを見つけ出すことができる。

まず、図1の3の配置をみてほしい。独特な配置になっている。各代表点 $a \cdot b_1 \cdot b_2 \cdot c \cdot e$ がそのような間隔で置かれている。実際のもは $A \cdot B_1 \cdot B_2 \cdot C \cdot E$ で表現する。

したがって、このような図を画くには、それぞれの部分の代表点はどこなのかを定めなければならない。それによって相互の位置関係を正確に把握しなければならない。

点dはとりわけ定まった位置がないので、あまり述べないことにする。

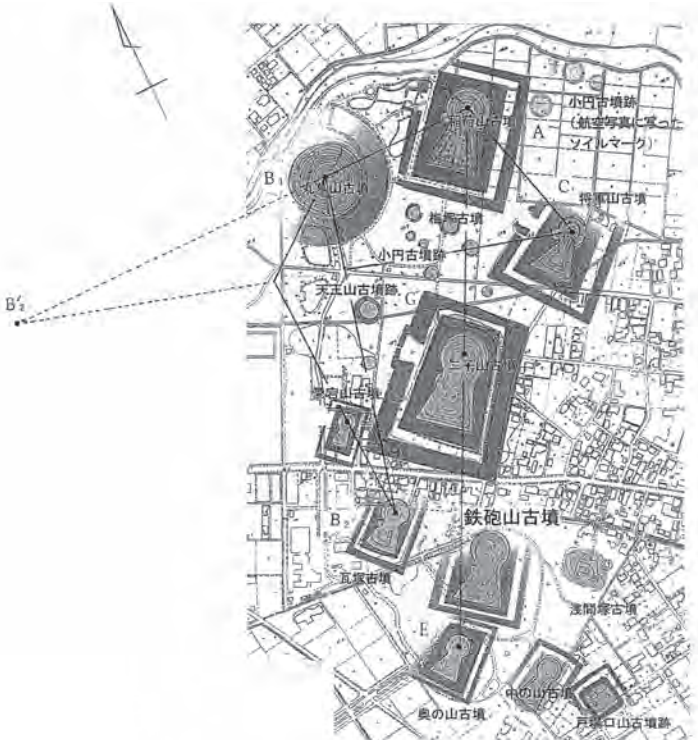


図1の3 埼玉古墳群
埼玉県立さきたま史跡の博物館「鉄砲山古墳発掘現地説明会(2010.9.25)
資料」に引用加筆

各点が定まった後、相互に直線を引き扁平三角形ができてゐる。ただし、直線 b_1 C は引かない。点 b_1 は直線 a b_2 上に存在し、点 b_1 はない場合も多い。 B_1 と B_2 は B としてまとめられ、 B_2 が代表している。

三角形 $a \ b' \ c$ は この伝達方法の基本的な配置である。点 $a \cdot b_1 \cdot b_2 \cdot c$ は原則的な配置順になる。

このほかに図1の1のように点aから点eに直線を引く場合がある。さらに図1の2や図1の10のように扁平三角形の内部や外部付近に点dが存在する場合

各 $A \cdot B_1 \cdot B_2 \cdot C \cdot E$ には、それぞれに特徴があり、逆に特徴からどれに該当するのかがわかる。実際にはそれぞれの位置に配置されていなくても、それぞれの位置に配置されたと考えれば便利である。例えば、 B_1 と B_2 が定まれば、未定の C を探し、さらには A を探す方法をとる。

ここで $A \cdot B_1 \cdot B_2 \cdot C \cdot E$ の特徴を述べる。

全体としての特徴、特定の相互における特徴、個々の特徴ということになる。例えば立岩堀田遺跡の C はサルタヒコになる。貝輪の着装による右腕 C の強調、足をばたつかせた様子は伊勢の海で貝にかまれておぼれる状態であろう。

まず全体としての共通した特徴がある。弥生時代の埴丘墓、古墳時代の古墳、一棺内のもの、天皇一代の宮都などである。造形の表現であるために、絶対的な表現は無理であつて、相対的な関係になっている。

特定の相互における特徴は、 B_1 と B_2 は仲間である。 B_1 と B_2 の特徴は B としての特徴であり、 B_1 と B_2 の独自の特徴はあまり見つかからない。

B_2 と C は、とりわけ比較すべき関係のようである。そのため B_2 と C だけに似ている部分もある。 B_2 を紹介することによって、 C の説明を間接的にするという手

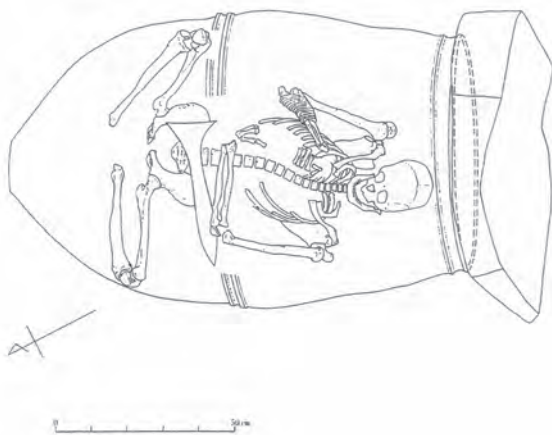


図1の4 34号甕棺
福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会編『立岩遺蹟』（河出書房
新社 1977）より引用転載

段をとる。Cはわかりにくい存在になりやすい。

EとAの関係は、とびきり遠く離れているにもかかわらず、直系として共通性が強い。AとCはもとより、CとEにも共通性はある。

今後はより読者の反応を早くするために、各造形を記紀神話になぞらえて、Aは高天原型（タカミムスヒ型）とする。B₁は須賀神社型（スサノヲ型）、B₂は出雲大社型（オホクニヌシ型）とし、二つ合わせて出雲型とする。Cは伊勢型（伊勢神宮内宮型またはアマテラス型）とする。Eは日向型（高千穂宮型・ホノニギ型）とする。

A（高天原型）の特徴は、なによりも全体の基準になっていることである。そのため最も早くから存在する。別格的な存在であつて、総合的である。Aに対して他は派生的・部分的という。Aは他を見ているという視点的な存在でもある。

B（出雲型）の特徴は、まずAに対して例外的なことである。さらに複雑であるため説明しやすい。騒がしい・不安定・古いなど否定的な価値観が続く。

個々にはなくB₁とB₂を合計してBとして一緒に考えるので、大きいことを特徴とする。つまり、この伝達方法は大きなことに否定的な考え方なのである。

B₁とB₂の特徴を指摘することは、相互乗り入れをしているので難しい。B₁は最も特徴的である。すなわち最も異質なのである。そして誤りが多い。

B₂は単数の場合もあるが、複数存在することを特徴とする。内容はAとCの間になるため、より正しくない、より望ましくないなどとなる。

C（伊勢型）は、一般的・単純・小さい・わかりやすい・静か・安定的など、Bと反対の関係になる。由緒があつて、かつ、新しいという特徴をもつ。最も遅い存在である。

E（日向型）の特徴は、特別・高貴などの内容になっている。大きさは他と比べ一定でなく、比較的小さい場合と大きい場合がある。

四 記紀神話は自らを語る

記紀神話は、伝えられてきた神話であることを自ら述べている。簡単でわかりやすいので、その伝達方法に基づいて説明してみよう。

まず注目するのは『古事記』よりも『日本書紀』の神話である。『日本書紀』の神話は十一段より成っている。各段は本文と一書でできている。一書の数もそれぞれ異なっていて少ない段は一、多い段は十一である。

すべての段が本文が先で、一書は後に記述されている。これだけでも本文がB₁、一書がB₂の特徴になっている。

具体的に考えやすくするために、図1の1のような扁平三角形の原則的な図をあらかじめ用意しておいて、各点に当てはめていく。この場合、本文はB₁、一書はB₂の場所になる。

次に『日本書紀』の神話に対応する神話といえ、いうまでもなく『古事記』の神話である。『古

【著者紹介】

柳沢 賢次（やなぎさわ けんじ）

1947年、浅間山南麓・長野県北佐久郡小沼村（現在の御代田町）塩野に生まれる。長野県上田高校、明治大学法学部卒業。東京大学事務員となり、定年退職。

紆余曲折の中、30代半ばすぎ『古事記』『日本書紀』に出会い、記紀神話は伝承されてきたものと気づく。その後、その時から2倍以上の年がたってしまった。

『天皇制最奥の論理―日本の不変思考について―』（日本図書刊行会、1990年）、『記紀神話伝承史 日本に哲学は存在した』（東洋出版、2020年）などの著書がある。

造形の記紀神話 ―埼玉古墳群を世界遺産に―

2023年10月17日 初版第一刷発行

著 者 柳沢 賢次

発行者 山本 智紀

印 刷 日本ワントゥワンソリューションズ（株）

発行所 まつやま書房

〒355-0017 埼玉県東松山市松葉町3-2-5

Tel.0493-22-4162 Fax.0493-22-4460

郵便振替 00190-3-70394

URL:<http://www.matsuyama-syobou.co.jp/>

© KENJI YANAGISAWA

ISBN 978-4-89623-201-1 C0021

著者・出版社に無断で、この本の内容を転載・コピー・写真・絵画その他これに準ずるものに利用することは著作権法に違反します。乱丁・落丁本はお取り替えいたします。定価はカバー・表紙に印刷してあります。